令和元年度　第９回霞ヶ浦学講座「霞ヶ浦×環境学習・ESD」実施報告案
実施日時：令和２年１月19日（日）13:30－15:30
場所：霞ケ浦環境科学センター多目的ホール
講師：小川達己(霞ケ浦環境科学センター嘱託)　　参加者数：26名
講演：「霞ヶ浦×環境学習・ESD」概要

【環境教育・環境学習の文脈】

環境問題や霞ヶ浦の富栄養化といった課題を解決するには，環境負荷を削減するための法令・しくみ，技術，教育・学習・啓発などの大きく３つが重要になってきます。

教育・学習という範疇では環境教育・学習的な取り組みは古くから行われていました。環境問題の顕在化に伴い環境教育・環境問題教育といった教育活動が学校教育や社会教育でも広く行われるようになりました。また，「国連 ESD（持続可能な開発のための教育）の10年」(2005～2014年)が実施され,ESDという概念も少しずつですが知られてきています。ここ数年，SDGs（持続可能な開発目標）も広く知られるようになり，教育現場でも取り組みが始まっています。また国連では，さらに取り組みを促すために国際的な枠組み「持続可能な開発のための教育：SDGs達成に向けて（ESD for SDGs)」が採択されました。

霞ヶ浦流域では，当センターをはじめとして多くの機関・団体によって水環境教育・環境学習が行われています。富栄養化の進行に伴い行政，市民団体等による水質浄化に向けた取り組みが始まり，啓発活動なども行われてきました。80 年代以降，富栄養化防止条例の制定，湖沼水質保全計画など法令や計画，水質保全対策がさらに整備，推進され，水郷水都全国会議，2度の世界湖沼会議の開催などを契機に浄化に向けた機運も高まり，霞ヶ浦流域では様々な水環境学習が行われ，広がってきました。

【環境学習なぜ，なにを，どのように】

１、環境学習「なぜ・・・行うのか」

環境教育・環境学習を行うには一般的な企画作りでのポイント「なぜ」「なにを」「どのように」の視点をふまえることが大切です。

環境教育・環境学習を行う上で基本となるのは，「なぜ」環境学習を行うかにあります。環境学習の目的として教育，学習を通じて「自然とのつながり」「社会とのつながり」「人とのつながり」に気づく，理解する，つながりを構築・再生するために行動することがあげられます。また，「持続可能な開発」もキーワードとなります。霞ヶ浦では例えば，食としてワカサギという霞ヶ浦からの恩恵を受けており，持続的にその恩恵を受けるには，私たち流域市民が，ワカサギについて理解を深める，ワカサギの生息空間などをどう保全するか考え，取り組んでいくことが重要になってきます。

２．学習内容「何を・・・行うのか」

イベント企画などの参加者に「何を」気づいてもらいたいか，伝えたいかが学習内容になります。これはテーマといわれるものですが，霞ヶ浦に関しても水質浄化，生物多様性，生態系サービス，水資源，治水，食，地質・地形，歴史といった環境科学から人文社会科学まで多様なテーマ，切り口が考えられます。身の回りや，地域の事柄，課題すべてがテーマになりえます。

３．「どのように・・・行う」学習方法

学習内容が決まれば，「どのように」行うか学習方法を考える必要があります。環境問題を学ぶためには多くの学習方法があり様々なアプローチの方法があります。実際，講演以外にも見学，実習・創作（実験や工作)，調査（計測やインタビューなど)，ワークショップ（ア

イデアや課題を出し合う，シミュレーションをするなど）などの方法が学習の現場で活用されています。例えば，河川の水質の現状を伝えたい場合，小学生や中学生の場合は視聴覚教材（紙芝居やビデオなど）を使ったり，現場に見学・調査に行ったりなど体験学習を組み合わせた方がより効果的です。霞ヶ浦流域では，実に多様な学習が行われており，体験学習など多くの方法が取り入れられています。

（表１　参照）

分類	内容など(一例)
講演(知る・気づく)	霞ヶ浦の概要，水質浄化，生態系サービス，治水・利水
見学(ふれる) 見学場所など	上・下水道，水質浄化施設，常陸川水門，横利根閘門，導水施設 土浦市博物館，かすみがうら市歴史博物館，用水機場，水神 干拓地，貝塚，古墳
工作・創作。実習	ろ過装置づくり，食用廃油で石鹸づくり，アクリルたわしづくり エコキャンドルづくり 間伐，枝打ち，外来植物駆除
調査(調べる)	水質調査，環境家計簿，湖岸のゴミ，霞ヶ浦の歴史（聞き取り）
ワークショップ 考える・実践につなげる	（手法名）ランキング，タイムライン，イメージマップ ウエッビング，フォトランゲッジ，

表１「霞ヶ浦」を題材にした環境学習の例（方法を中心に分類）

また，学習の構成のポイントとしては「起承転結」に代表されるようにストーリーだてることが重要です。「気づき」「理解」「行動」と展開していく構成の仕方もあります。これは「霞ヶ浦で（in）学ぶ・遊ぶ」「霞ヶ浦について（about）学ぶ」「霞ヶ浦のために（for）できること学ぶ」と理解してもよいと思います。発達段階に応じてこれらの目的，学習方法を組み合わせていくことも重要です。

「霞ヶ浦学習」ととらえると流域には，当センターをはじめとして様々な機関・団体があり，霞ヶ浦について学習していくには十分な環境であるといえます。ミリオンズレイクともいわれるように流域に住む約 96 万人もの方々が自分事として捉え，環境学習の場に参加するなど霞ヶ浦に関わっていく必要を感じます。